

Interview by Vicente Gutierrez
for Shift Art Magazine (Tokyo - 2008) <http://www.shift.jp.org>
Original link for the article (English):
http://www.shift.jp.org/en/archives/2008/07/eric_van_hove.html

Original link for the article (Japanese):
http://www.shift.jp.org/ja/archives/2008/07/eric_van_hove.html

[エリック・ヴァン・ホーヴ](#)は、ニューヨークから東京に巡回し開催される「[アトミックサンシャインの中へ](#)」に参加する11人のアーティストの1人だ。[日本国平和憲法第9条](#)を軸に展開する、歴史的関係の深いこの展覧会では、渡辺真也氏のキュレーションによる作品が展示され、戦後日本が抱える問題に取り組んでいる。第9条が現代日本の国家において定期的に話題となり浮上している中で、多く人は、その意味についてコメントや話し合いには消極的だ。それは、地域政情不安定であるとされる時代においてさえもである。見直しの可能性が時折浮上するそのエコーとして、「アトミックサンシャインの中へ」はこの政治的要因をめぐる難題に対する意識を喚起するに違いない。今回、SHIFTは、ベルギーのアーティスト、エリック・ヴァン・ホーヴにインタビューし、出展した作品やこのプロジェクトへの彼の思いなどについて伺った。



Courtesy of Eric Van Hove

「アトミックサンシャインの中へ」に参加することになった経緯を聞かせて下さい。

(キュレーターの渡辺) 真也と知り合ったのが2005年で、僕がちょうどユーゴスラビアのアーティスト、セイラ・カメリッチのアシスタントをしていた時で、真也が前回の展覧会を手がけていた時です。真也が第9条をめぐる問題に関する展覧会をやると決めた時、その年に沖縄で僕が手がけた「日本国憲法 みみずアウトダフェ」のことを知って、真也から連絡をもらいました。彼は、第9条について考えている日本の若手アーティストが少ない中で、外国の若手アーティストがそれに取り組んでいるという事実が興味深かったようです。

多くの日本人は第9条について語りたがらないと言って間違いはないでしょう。そこで気になるのは、非日本人アーティストとして、第9条へアプローチする中でどのような異なる考えを持っていましたか？

僕は、アルジェリアで生まれ、カメルーンで育ち、ベルギーのパスポートを持ち、母国語はフランス語で、名前はスカンジナビア語で、姓はオランダ語で、そして10年近く日本に住んでいます。自分を東京人と見なすのに十分な時間を過ごしてきました。それからみると、自分の外来性で遊べるんだけど、今ではいつでもベルギーにいる時でも、僕は外国人なんです。むしろ移住者という風に考えたい。それは、流浪、航海、遠足や、見せかけの休日、その間のどれかに当てはまるような、移住する束の間のトラベラーです。

僕は、「国籍」という境界線の外側で、正確にその問題を考えるために、僕自身を自己追放してみることにしたのです。デュシャンの「regardeur」という概念の可能性について考えることに興味があります。それは、徐々にその対応する言葉を「foreigner」の中で見い出していくものです。ローカルとグローバルには共通点があります。ベルギー人として、日本国憲法は僕の問題ではないと考える人はいるでしょう。でも、アーティストとして、自分が言いたいことがあると信じています。一時でもここに住み、社会の中でアーティストは社会的役割を持っているということが分かるから、なおさら何か言わないといけないと思うのです。僕は、そういった社会力学に興味があるのです。日本のアーティストとして、または、ベルギーのアーティストとして、そのようなものがあるかどうか確かではないのです。アーティストがいる。それだけです。パスポート自体は、100年前以前には存在していませんでした。僕のアートに国家的な関連性があるかどうかというのは、そもそもつまらないことです。



Courtesy of Eric Van Hove & Shinya Watanabe

では、作品そのものについて教えてください。

持続可能な作品を作ることがアイデアとしてありました。それは物理的に持続可能なだけでなく、歴史的にも、哲学的にも、社会的にも持続可能であるものです。地域開発プロジェクトの一

貫だったので、作品は那覇にかつてあった青果市場に設置されることになっていました。そこで余った野菜を燃やしているということにすぐに着目し、ミミズ飼育場を提供することを決めました。ミミズ飼育場は、それら廃棄物を再生利用して肥料とすることを可能にし、彼らはそこから利益を得ることができる。それは、自分が受け取る制作資金を生み、時間とともに彼らに譲られていく。これは、テクニカル・アドバイザーとしてアーティストのリチャード・トーマスと一緒にコラボレートした作品です。

憲法やそれに付随する歴史について話し合ったのが、沖縄に滞在していた頃です。夜通しで、その力学について考え、再生紙に憲法をコピーし、それをミミズの寝床の上に並べ、地元のテレビ局へ連絡して、テレビ局の感度の良いマイクを利用し、ミミズがむしゃむしゃと食べる音を録音しました。プロジェクトに対する地元の熱意が高まりました。僕のラップトップ・コンピューターに繋がれた地方の発信機を使用して放送することを決めました。それは、ミミズが野菜や問題の憲法のコピーされた紙を消化しているのを、チャンネルを合わせて聞くというようなものです。

それを反逆とか冒とくだと言う人もいるでしょうね....。

ええ、そうでしょうね。だけど、逆のスタンスをとることもできる。それは、リサイクルすること（再利用すること）の楽観的なジェスチャーとして捉えることもできます。つまり、リサイクルは悪いことではなく、それは再生することなのだ。大抵、私の作品は両刃の剣なところがあり、制約がなく自由です。



Courtesy of Eric Van Hove & Shinya Watanabe

あなたは、この作品にどのくらい浄化作用があると思いますか？見る人には、そのようなリアクションはあったのでしょうか？

さて、ここでお焚き上げについて触れたいと思います。神道儀礼的な伝統において、僧侶が

時々、ものを浄化するために燃やす儀式を行います。それは、長い間にわたり何かを使用した時に、そこに多くのエネルギーや情を注ぐということや、ある時点でものが人を悩ませてしまうという概念にどこか基づいている。それは、たとえば、クリス・マルケルの「サン・ソレイユ」に見られる、人形を燃やす行為を思い起こします。

ある夜展覧会の後か、展覧会中に、箱の側に立ち、小さい紙きれにメッセージを書いている2人の老人を見掛けました。この時すでに、ミミズは私の小さい友人のようになっていて、ミミズ達にあげようとレストランからもらってきたアボカドの皮をポケットに忍ばせてたりしてね

(笑)。2人の老人は、実は戦争についての記憶か、アメリカ人との戦いの際に前線で姿を消した仲間の名前を書き留めていました。それから、彼らはそのメッセージをミミズに食べさせ、そして、ラジオから聴こえる、ミミズがむしゃむしゃと食べる音を聴いていました。それは、とても力強い、私の作品のアプロプリエーションではないでしょうか。

アーティストとして、これ以上ハッピーなことはないです。それは、彼らの痛みを伴う問題とその思いを消化してくれるミミズ達がかここにいるという、作品全体にカタルシス次元を与えました。そういうわけで、「日本国憲法 みみずアウトダフェ」を攻撃的であるとか、冒とく的なものとして考えることは、あまりにちっちゃなことです。それは、彼ら老人達、彼らが見たものです。ミミズに彼らの抱える問題を与えました。そこに清めるということの本質を見ることができます。日本でみられるような精霊信仰の文化においては特に。年配の女性さえ、ミミズが自然に携えている目的と機能を知っていました。ミミズリサイクルが、昔どこか未発達な社会で利用されていた、そのことを彼女達がまだ少女だった頃に母親から伝えられていたのでしょう。

制作の上で難しかったことや失敗はありましたか？

そんなになかったです。箱を僕が制作し、リチャードからミミズ飼育場を作るのに湿気についてなどアドバイスを受けました。ミミズに関しては、東京から運んだのですが、それ自体は何も問題なくて、その後の管理ですね。大きなミミズを飼育していた時面白かったのが、与えるもの何でも食べてしまうから、ミミズのコロニーがどんどんと大きくなっていく。そして、気温が下がり過ぎると、みんな死んでしまうし、何も与えなくても最終的には死んでしまうんです。でも、卵が土の中に残っているんで、再びコンディションが良くなると、卵が孵化する。何にでも耐えることができる素晴らしい驚きの生命体ですね。一種のアートそれ自体のメタファーみたい(笑)！

真也が最近沖縄に行ってきたのは、その作品はまだ使用されているというのです。今年で3年目です。そのプロジェクトから利益を儲ける代わりに(プロジェクトの当初の意図であり、たとえばアフリカにいるならば、確実に説明する必要がないこと)、市場の老女がとても肥沃な土を保っているという。これはもしかしたら、僕がそこへ戻って「おばさん！どうぞ！使ってくださいよ！」と言うのを、待っているのかもしれない。



Courtesy of Eric Van Hove & Shinya Watanabe

話を少し戻すと、都市環境の中で展示されているあなたの作品からは、自然を思い起こさせる、もしくは、何か原始的なものを使用している傾向が目につきます。たとえば、砂、貝、岩、動物や、ヒマラヤ山脈、ネパール、象牙海岸や東ヨーロッパの荒野のような所にいる地方の人々、というような要素の使用です。これは、伝統的なもの、それとも、失われたものへの回帰ですか？これが作品の傾向としてあるかどうか話してもらえますか？

おそらくロマンチックな物語がここにはあります。日本が遠いからというだけでなく、たとえば思想家の西田幾多郎のもとへ導かれ、有益な補完性を求めてということでもありました。もし、失われた自然との繋がりに興味をおぼえるというのであれば、直観力を有利に働かせて、先験論者がなしたような詩的なタスクとしてなら理解することができます。文字通り世界に刻むことを意図している、たとえば「[胎書シリーズ \(Metragram Series\)](#)」の巡礼のような作品やシリーズを通して、現代西洋美術の媒介物につきものの独断論をリサイクルしたくなります。ヘンリー・デイビッド・ソロー (1817~1862) は、彼のエッセイ「散歩」で、「ネイチャーライティング」の考えを挙げ、このようにも言っている。『彼は、彼の代わりに紡ぎ出される詩で風や水流に感銘を与えることができる詩人であろう... (注：翻訳者の訳による)』。この理由から、作品にはさまざまな要素が存在するのでしょうか。あと、僕は放浪癖があるから、部分的に失われた場所を利用して、今日ありがちなヨーロッパ中心主義的なものを超越し、地理を超えて精神的な理想に到達するのです。あなたが言うのと逆で、僕は文明を思い起こすのに、純粋な自然でよりも、できるだけ都市環境で制作しているのです。

質問の中で、作品の一過性な性質についても指摘しているようですが、太古から存在する、一過性と永続性の境界としての芸術品の現状についての質問であることを信じています。

僕は、アートワークを「一過性」と分類するようになる社会が、時間との遠ざけられた関係を証明すると思っています。アートワークに「一過性」とラベル付けすることは、オブザーバー側が「具体的である」という逆説からのみ行われる。社会が下手な形容でアートを分類するという事実は、僕にとっては、芸術の墜落の高まりや抽象化を証明するものでしかない。たとえばアプリ

カでは、みんなが人生が儂いということを知っているから、一過性のアートについて語るものは誰もいない。極言すれば、人生の儂さは正確には時間と呼ばれるものです。絵画は燃えつき、ローマの彫刻は、後の帝国により建築材料として使用される。また、永続性あるバッハとハイドンの楽曲は、初期に幾多も繰り返された後に、同じように1人の観衆のためにたった一度だけ演奏される運命にある。すなわち、パリンプセストです。

オリジナルは存在しないのです。それは西洋のユートピア、都市伝説です。



Courtesy of Eric Van Hove

更に聞きたいのですが、今までトータルで8年日本で生活されていますが、個人として、社会的、文化的に、日本のどんなところに魅力を感じていますか？

遠かったということ。後は放浪癖があったので、ぜひ日本を訪ねてみたいと。アンリ・ミショーや、ジャック・デリダの「*Monolingualism of the Other*」(1998)とアブデルケビル・ハティビ「*Amour Bilingue*」(2つの言語の愛 1983)の後を追っていたと思います。ヨーロッパの言語ではないところへ行き、母国語をなくす必要があると決めたのです。そして、日本語が最も難しい言語だとも聞いていました。

しかし、あなたをここに引き止める何かあるのではないかと...

日本への興味は、日本の精霊信仰がアフリカへリンクしているということからでもあります。精霊信仰があるのは、世界ではこの2地域しかないのではないかと思います。東京は、精霊信仰とテクノロジーと現代的なものが交わっている唯一の都市です。日本国外で精霊信仰とつながりある他の全ての都市は、発展途上国にあります。アフリカで育ってきた自分は、それを実際に見てきました。僕は、彼らがそうであると思うより、アフリカと日本はもっとつながっていると思います。

精霊信仰が未来であると僕は思います。

なぜ、日本で研究を修了することに決めたのですか？

[東京学芸大学](#)で長野秀章教授の指導のもと書道を研究することに5年を費やしました。そして、自分が学んだことを消化するのに、もっと時間を必要だと感じたのです。小幡和枝教授との出会いから、東京芸術大学で博士号コースを始めることを決めました。そして、私は現代美術から書道まで形成の環を完了しなければなりません。